

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【社会】

テレワークは、「一億総活躍社会の実現」や「地方創生」に寄与し、「働き方改革」にも有効な手段として期待されています。

少子高齢化が加速し労働力人口が年々減少しているわが国では、生産性の向上とともに、現在働きたくても職に就けないでいる方々の力の活用が非常に重要です。「**自宅なら 働ける人 果てしなく**」（準グランプリ賞作品）は、通勤するのは難しいけれども自宅の仕事なら出来る人が世の中には多数いることを表した作品です。テレワークは、そういう人が働くための重要な手段になり得ます。例えば、障がいを持つ人などがテレワークでの仕事を通じて社会に参画し、自分に自信を持てるようになれば素晴らしいことですね。

「人生百年時代」と言われます。テレワークを通じて育児や介護と仕事の両立が出来たり、退職後の第二の人生をテレワークにより生き生きと過ごすことが出来たりするなど、テレワークは人生を豊かに暮らすための大きな力になりましょう。「**テレワーク 人生百年 行けるやん**」のように、テレワークを活用して健康で長生きすることが出来れば、この上ないことですね。

北朝鮮問題や少子高齢化社会が「国難」と言われる時代ですが、「**「国難」の 武器核じゃなく テレワーク**」のとおり、テレワークはわが国が少子高齢化社会に立ち向かっていくうえでの大きな武器になります。また、テレワークは、交通混雑の緩和にも大きな力を発揮します。「**電車にも 一人分の 空きがでる？**」のような一人ひとりの積み重ねが、ひいては大きな効果をもたらすのではないのでしょうか。特に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックには海外から大勢の観光客が日本に来ることが予想され、交通混雑が懸念されます。そこで、「**オリ・パラに テレワーク・デイ 効果あり**」のとおり、政府は、オリンピック開会式である7月24日を「テレワーク・デイ」と定め、この期間のテレワークの実施を推進する運動を進めています。

こうしたテレワーク推進の取組が進むことにより、「**「いいな」から「うちも」に変わった テレワーク**」のように、テレワーク実施企業が一部の特別な企業のものでなく、多くの企業が実施するあたりまえのものになっていくと良いですね。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【多様な働き方】

テレワークは、主に育児や介護を行う人たちが仕事との両立を可能とする手段として普及してきましたが、テレワークは、例えば通勤時間の削減によって生まれた時間を有効に使うことで「ワーク・ライフ・バランス」の向上に寄与出来るものであり、育児・介護の実施者に留まらず、男女問わずすべての社員が対象になり得るものです。

「**車いす テレワークなら ハンデなし**」は、障がいを持つ方でもテレワークをすることは出来、同じ土俵の上で勝負すれば、優れた能力を発揮することが出来ることを表した作品です。障がい者、高齢者、通勤電車に乗れない方など、テレワークは、様々な方に働く場を提供することが出来、まさに「**テレワーク 働き方の バリアフリー**」と言えましょう。

こうした便利なテレワークですが、企業等が導入するうえでは様々な障壁があるのもまた事実です。労務管理の制度、情報セキュリティの確保などを課題に挙げる企業等も多いのですが、実は、テレワーク導入のうえで最も大きな課題は、組織の風土や意識改革の問題です。「**変えるもの 制度・システム いや風土**」は、変化をためらい従来の仕事のやり方に固執しがちな組織風土を変えていくことの重要性を謳った作品です。

テレワークはオフィスを離れて業務を行うため、自律的で自己管理を伴う働き方が求められます。成果を上げるために、自分で業務計画を立てスケジュール管理を行ったり目標管理を行ったりすることが必要であり、「**本当の 実力試す テレワーク**」と言えましょう。逆に言えば、オフィスでの仕事よりも自律的な分、責任感も生まれ仕事のやりがいも高まるのが、テレワークだと言えるのではないのでしょうか。

テレワークは、「**災害の 企業存続 これありき**」のとおり、災害時など通勤が困難な場合でも自宅等で業務を行うことが出来るため、企業にとってBCP（事業継続）にも大きな効果があります。それ以外に、生産性の向上、人材の確保・育成、フリーアドレスやペーパーレス等によるコストダウンなど、テレワークは、企業価値の向上にも大きく寄与する施策なのです。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【上司部下】

テレワークや働き方改革を推進するうえで大きな障壁となるものに「粘土層」の存在があります。粘土層は、上からも下からも水を通さない粘土質の地層のことで、「ライフコース多様化とテレワーク部会」では、この言葉を、古い価値観や既存のやり方に固執して業務改革などの新しいチャレンジに取り組もうとしない「中間管理職」を意味する言葉として使ったところ、それが広く知られるようになりました。

実際、経営トップの支援が得られても、中間管理職の抵抗が大きいとテレワークの導入はなかなか進まないことが多く、テレワークの普及の鍵は、こうした粘土層の人たちをいかに巻き込み理解を得るか、にかかっていると言えます。テレワークの試行導入の際に敢えて中間管理職を対象にすることで成功した企業もありますし、テレワークを体験したことで、自分がこれまでどれだけ無駄な会議に出席して時間を費やしていたかに気づいた管理職もいると聞きます。最近では、こうした粘土層にも徐々に変化の兆しが見られるようになってきました（コラム参照）。こうした中間管理職の理解促進の取組が今後益々求められます。

中間管理職の重要な役割として、部下の「目標」と「成果」に目を向け、公正な評価を行うことが挙げられます。概して、日本企業では、上司は「長時間残って働く」部下を高く評価する傾向がありますが、本当に評価すべきは、労働時間ではなく成果です。

中間管理職には、テレワークの実施者であるか否かに関わらず、部下の業務を適正にマネジメントし彼らを公正に評価することが求められ、そのための能力が必要となってきます。テレワークの導入は、まさに「**能力が問われる管理者 青くなり**」という状況を生む訳です。

こうした中間管理職も、家庭に入るとその顔は十人十色と言えましょう。家庭でも職場と同じ顔の人もいれば、全く逆の顔を見せる人もいることでしょう。「**鬼課長 わずか五秒で パパの顔**」ということもあるかもしれません。いずれにしても、管理者であっても、ワーク・ライフ・バランスが重要であることは変わりません。全ての社員にとって、テレワークは日々の生活をより豊かにする手段となりましょう。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## <コラム① 粘土層の変化>

企業等にとってテレワークの導入推進の障壁ともなる「粘土層」を扱う作品を見てみると、年を経るごとに、その内容に変化がみられることが分かります。

以前は、完全に抵抗勢力であった「粘土層」も、段々テレワークを行うようになり、更には推進役になることも。以下に、この3年間の「粘土層」を扱った作品の変化を見てみましょう。



粘土層 だった自分が 恥ずかしい  
らくちゃん(平成29年度)

粘土層 やらせてみたら 推進派  
ともはる(平成29年度)

粘土でも 握り進めれば 水流れ  
導入担当者(平成29年度)

粘土層 テレワーク・Dayで 開眼す  
ゆきだるま(平成29年度)

管理者の オレ在宅でも 回るとは  
高嶺の花水木(平成28年度)

出社して なんぼと唱える 粘土層  
ぼん太(平成27年度)



# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【働き方（仕事）】

テレワークを実施するうえでは、社内の資料をファイル化して社員が共有できるようにしたり、外出先からメールの受発信が出来るようにするなど、ICT（情報通信技術）を駆使した取組が必要となります。

ICTが発達した現在では、スマホやタブレット端末でもオフィスにいるのと同様な様々な業務が可能になってきています。まさに「**オフィスさえ スマホのように 持ち歩く**」時代になってきており、技術の発展はテレワーク普及の大きな力になると思われま

一方で、働き方改革やテレワークの推進には乗り越えるべき課題が多いのも確かです。

「**今日もまた はんこのために 出社する**」は、働き方改革の困難さを表現した作品と言えます。テレワークを実施するうえでは、ペーパーレス化や決裁のオンライン化などを進め、仕事のやり方を変えていく風土を作っていくことが重要ですが、なかなかそれが出来ない企業も多いように思います。「はんこ」は、テレワークの足かせとなる旧態依然の仕事のやり方や風習の象徴と言えるのではないのでしょうか。テレワークの実施を妨げる障壁を一つひとつ取り除いていくことが大きな課題ですね。

また、テレワーク実施上の企業側の心配事として、「会社の管理から離れたところで仕事をする社員がサボるのではないか」ということもよく言われます。果たしてそうでしょうか。

テレワーカーの多くは、自分が目の届かないところで働いているが故に、オフィス以上の緊張感と責任感を持って仕事をし、成果を出そうとしていると思われま

「**サボる人 オフィスにいたって サボるよね**」は、テレワーカーだからサボるのではなく、サボる人はオフィスにいてもサボるということを謳った作品です。オフィスにいてもテレワークをしても、出来る人は自分を律してしっかり仕事をし、成果を上げるものですし、そういう働き方が企業に求められているのではないのでしょうか。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【働き方（職場）】

テレワークは、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方です。

在宅勤務のほか、サテライトオフィス、喫茶店、移動中の電車の中など、オフィス以外の様々な場所が仕事場となり得ます。

「**カフェテラス パソコンを開けば すぐオフィス**」は、1台のパソコンが、どんな場所でもたちまちのうちにオフィスと同じ仕事ができる空間に変えてしまう、というテレワークの特長を表現した作品です。

場所を選ばず仕事ができるテレワークは、働くことの可能性を大きく広げるものとなります。夫の転勤で引っ越しを余儀なくされたとしても、移転先でテレワークを行うことで妻が仕事を続けることが出来た事例もありますし、「**駐妻も テレワークなら 働ける**」のように、海外に行ったとしても働くことは可能となりましょう。

また、ウェブ会議を活用することで、どこにいても世界とつながることが出来るようになり、「**ど田舎の 茶の間で実感 グローバル**」のように、田舎の片隅でもグローバルな仕事をして世界を実感することも出来ます。

こうした場所にとらわれない働き方の導入は、働き方改革を進めていくための大きな一歩であり「**改革は 居間（今）から始まる テレワーク**」と言えます。

最近、「ワーケーション」という言葉がよく使われるようになってきました。「ワーク」と「バケーション」を掛け合わせた言葉で、例えば、夏休みなどにおいて、家族とともに帰省したりバカンスを取ったりする際に、期間の前半は休暇を取り後半はその地に残ってテレワークをする、というような過ごし方です。

「**テレワーク 今度の夏は ふるさとで**」のように故郷で仕事をすることも出来ますし、旅行先で仕事ができることで急な会議が入っても予定していた家族旅行をキャンセルせずに済んだ事例もあるようです。

台風や大雪など通勤困難な時に在宅で仕事ができるのも、テレワークのメリットです。「**はじめたい 外は台風 テレワーク**」は、テレワークを導入していない企業の人々が「テレワークが出来ればいいのに」ということを実感する場面かもしれませんね。

様々なメリットがあるテレワークが普及し、多くの人々がそのメリットを享受することで、より豊かで幸せな生活を送ることが出来れば素晴らしいことですね。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【コミュニケーション】

テレワークを導入・実施していくうえでは、テレワーカーが職場の人たちと十分なコミュニケーションを取ること、そして信頼関係を構築することが非常に重要です。そして、「**バーチャルも リアルもベースは 思いやり**」のとおり、このことは、テレワークに限らず、オフィスで仕事をする場合にも当てはまることなのではないかと思われます。

ウェブ会議などが積極的に行われているあるIT関連の会社では、毎朝、朝礼を行い社員の健康状態の確認等をしているそうで、そうしたコミュニケーションがテレワークを含めた会社の業務運営を支えるベースになっているとのこと。とかく孤独になりがちなテレワーカーに対し、職場の人たちが思いを寄せ、その状況を理解する姿勢を持つことも非常に重要なことと言えます。

テレワーカーがコミュニケーションを取るツールとして、ウェブ会議などは非常に有効な手段です。必要な時に業務内容の報告・共有・相談などが出来れば、業務効率も上がります。

「**「ちょっといい？」 全国の人が すぐ集結**」のように、全国で業務を行うテレワーカーたちが簡単に繋がってコミュニケーションが取れるということは、ウェブ会議の大きな利点ですね。

デジタルネイティブと言われる若者は、こうしたツールを容易に使いこなすことが出来、テレワークに抵抗なく入っていける人たちと言えます。先輩社員たちは、「**若者の チャットの速さに 舌を巻く**」ことになりそうですが、何とかついて行きたいものです。

「インスタ映え」という言葉が流行語大賞に輝きましたが、見栄えの良さに関心が向くのは、テレワーカーでも同じことでしょう。

「**ウェブ会議 インスタ映えに 家飾り**」のように、ウェブ会議で自分の家を少しでも良く見せたいと飾りたい心境はよく分かりますね。

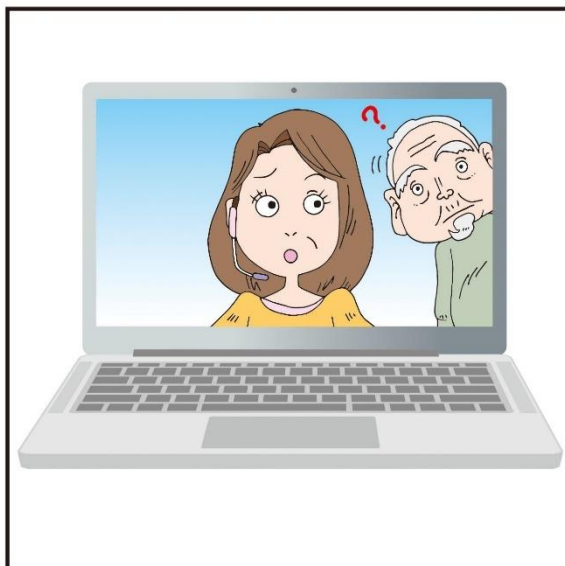
でも、テレワーカーが他の人に関心を持ってもらえることは良いことです。他者に対して無関心にならずに興味を持ち、相手の心情を慮る姿勢を持つことが、明るく活気ある風通しの良い組織に繋がっていくのではないのでしょうか。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## <コラム② ウェブ会議のハプニング>

コミュニケーションを取るうえで便利なウェブ会議ですが、会議中、様々なハプニングが発生し、テレワーカーをハラハラさせることもあります。ここでは、そんな作品を集めてみました。

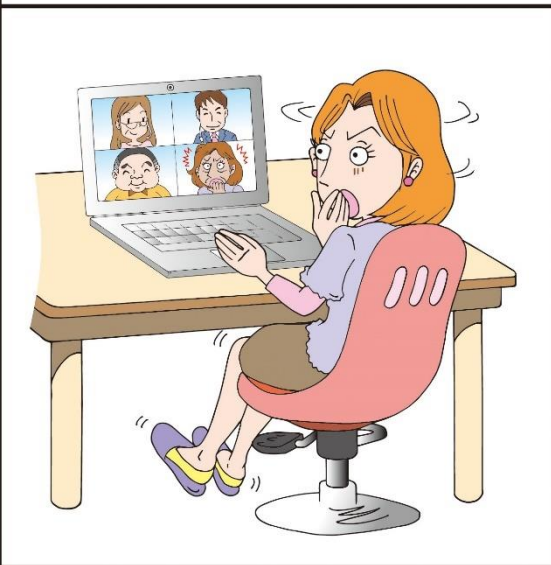
テレ会議 爺ちゃんのそっと 映り込み  
らくちゃん



テレ会議 画面の隅から ネコパンチ  
らくちゃん



会議中 「ママおしっこ」の 声響き  
青い春



ウェブ会議 初めて気づいた 顔のしわ  
わたがし



# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【育児・介護】

テレワークを語るうえで、育児や介護をしながら仕事を続けたいと願う大勢の人々の存在は、避けては通れません。育児のために仕事を続けることを断念する人や介護のために離職する人はまだまだ多く、「**テレワーク 仕事と育児の 二刀流**」のとおり、テレワークは、そうした人たちが育児・介護と仕事を両立するための大きな手助けになります。ある自治体のテレワーク導入に尽力された方が、退職した際に、ある女性から「テレワークがあったおかげで仕事を辞めなくてすんだ」と涙ながらに感謝されたと聞きます。

とは言え、育児や介護と仕事を両立させていくことは容易なことではありません。公私のメリハリをつけながらテレワーカーたちは、それぞれ工夫と努力をしながら懸命に両立を図っています。

「**テレワーク 時々看に行く 母の部屋**」のように、仕事の合間に介護している母親の様子を見に行ったりすることもあるでしょうし、時間のやりくりを工夫して子どもの保育園の送り迎えやお弁当作りを行っている人もいでしょう。特に介護は、いつ終わるか分からず、徐々に負担も増えてくるものです。テレワークを活用しつつ、ケア・マネージャーを始めとする多くの方々と連携・協力しながら介護を行っている方も多いようです。

こうした苦労は多いですが、テレワークにより通勤時間がなくなれば、時間の有効活用はより可能になります。

「**こどもへの 「早くしてっ！」が 減る火曜**」は、1週間のうち火曜日はテレワークを行える母親が、通勤が必要な他の曜日に比べて火曜日だけは気持ちに余裕が持てて、いつもならつつい子どもを急かすような言葉をかけてしまうことが減ることを表現した作品です。子どもにとっても、テレワークは嬉しいものですね。

更に、「**昼休み ママに代わって イクメンに**」のように、テレワークを男性も積極的に行うようになることで、男性が家で仕事をしながら、昼休みの時間帯は、母親に代わってランチを作ったり子どもの相手をしたりするなど、より家庭への関わりを増やしていくことも出来ます。

テレワークにより、仕事と家庭の両方を大切に充実した生活を送れる人が増えることが期待できるのではないのでしょうか。

# 「テレワーク川柳」 作品解説

## 【家庭】

「人生百年時代」と言われる現代において、ワーク・ライフ・バランスをいかにうまく取り、日々の生活を豊かで充実したものにしていけるかは大きな課題と言えましょう。テレワークは、家庭と仕事のバランスをうまく取っていくための非常に有効な手段です。

「**終業の 合図は子とする ハイタッチ**」（グランプリ賞作品）は、テレワークを行う人が公私の切り替えを行う場面を描いた作品ですが、しっかり仕事を行った後、家庭の時間への転換を子どもとのハイタッチという形で行うというワーク・ライフ・バランスの在り方は、とても良いものですね。

また、テレワークを男性も積極的に行うようになると、「**お帰りと 妻を迎える テレワーク**」のように、オフィスで仕事をする妻を、テレワークをする夫が家で食事を作りながら迎えるという場面も増えてくるのではないのでしょうか。テレワークは男性の料理の腕前を向上させる効果もありそうです。

ただ、日本では、家庭をあまり顧みず会社の仕事に没頭してきた人も多いかもしれません。こうした人にとっては、仕事以外の人生との向き合い方は大きな課題ですね。テレワークをやるうにも、「**ハードルは 家庭に居場所がないことか**」ということにならないよう、日ごろから気をつける必要がありますね。なかなか難しい問題ではありますが。。

テレワークの効用は、「**寛げる 家だからこそ 出たプラン**」のように、オフィスと離れた環境で仕事をすることで、オフィスでは生まれにくいアイデアが生まれるということも挙げられます。他の邪魔をされることがなく、リラックスした雰囲気の中で集中して仕事ができますので、業務効率上がるという効果があることも指摘されているところです。

テレワークは、生産性の向上、優秀な人材の維持・確保、災害時の事業継続など、企業にとって経営上の様々なメリットがあるものと言えましょう。近年は、テレワークを単なる福利厚生的なものではなく、重要な経営課題と位置づけ、導入を推進している企業も増えています。こういう企業が増え、テレワークが地方や中小企業にも広まっていくことが、今後益々期待されます。